

て、3、4才になると高順位はもちろん、低順位のメスにも中心部から追い出される。また交尾期になると、3、4才のオスは非交尾期とくらべて中心部に近よらなくなる。

ニホンザルの記号行動

他者の存在とオペラント行動¹⁾

岩脇 三良 (中京大・文)

(目 的)

隣接した部屋におかれたニホンザルが視覚的聴覚的コンタクトのもとに、相手のサルに食餌を与えるようになる過程をオペラント条件づけによって検討することを目的とした。

(方 法)

一方のサルのパネル押し反応に対して、FR 50の強化スケジュールにより、食餌が与えられる。ある条件では自分だけに、ある条件では自分と相手の両者に食餌が与えられるような状況を設定する。

それらの条件を変化させることにより、サルの行動とくに working サルの行動を行動累積記録器に記録する。相手のサルに食餌が与えられるかどうかは、パネルランプの色によって規定される。

(研究経過)

オペラント条件づけの手続きにより、パネル操作とパネルランプの色の弁別が、1日60強化、FR50のスケジュールで学習された。まず相手ザルが隣接の部屋にいない状態で、ついで視覚的聴覚的コンタクトのある隣接の部屋に相手ザルの存在する状況で実験が行なわれた。

相手ザルの餌と関係なく、位置偏好反応が示されたので、自分のみに餌が出る、または相手のみに餌が出る条件が設定された。サルは自分に餌の出るパネルを示すランプの色を弁別していることが、はっきりと示されたので、もとの条件つまり一方のランプのあるパネルを叩けば自分と相手、もう一方のパネルを叩けば自分のみに餌が出る条件に戻された。さらにランプの色を逆にしたり、どちらのパネルを叩いても自分に餌が出ない条件などが加えられた。

(結 果)

以上の経過から、自分に餌が出さえすれば、サルは相手のサルに餌が出て出なくても反応することが明らかになった。自分に餌が出なければ、サルの行動は直ちに消去した。

人間の行動研究から類推された動物の利他行動も、細かい条件を分析すると、社会心理学で定義している概念が必ずしも明確でなく、利他行動の背後には利己が潜んでいることが示唆された。

群構造と母子関係 (野生ニホンザル群)

小林 紀子 (お茶の水女子大学)

箱根山系に生棲するニホンザル群の内、現在は3群に餌付けがなされている。本研究では中でも研究の進んでいる天昭山群(約100頭)で観察をおこなった。母猿の保育行動の変容と子猿の母猿に対する行動の変容を群内の各個体の行動と合わせて観察するために、メス猿を大きく上・中・下の順位毎にまとめて各順位から母子を選び出した。観察期間は出産が始まる4月から遊牧が始まって群が餌さ場に出なくなる6月までの約2ヶ月と、冬期に2ヶ月程おこなった。観察には1回15分で30秒毎に行動をチェックするチェックシートを用い、同時に母子とそれに係わった個体の行動をできるだけ記録した。チェックする行動の項目は R. A. Hinde の研究を参考にした。観察は昭和48年度から続いているもので以下にまとめると、

- ①48年度、上位の母猿は常にボス猿から攻撃を受けていて、子猿の行動に規制を加える期間が長く、逆に
- ②ボス猿と友好的な下位の母猿は子猿の行動を規制する期間が短い。生後1週間位は子猿は母親から離れようとしたが母猿は規制をしていた。
- ③中位の母猿は2年を通して、子猿の行動本位で規制はゆるやかであった。
- ④49年度、上位の母猿は当時のボス猿が群から去ったために子猿への行動規制を加える期間は短くなった。
- ⑤下位の母猿で特に孤立的な行動をする場合には、子猿への拒否の行動が顕著であった。

授乳、世話等の面で全ての母猿が充分におこなった。グルーミングの時間は49年度の方が増加し、ボス猿が去って群が落ちついたためと思われる。家系的結び付き、年令等の考察は割愛した。

餌付け集団における個体間距離、対人距離、Vocal Aggression 量の測定—近畿、中国三集団の比較(その1)

藤井 尚教 (阪大・人間科学)

米川 文雄 (")

小山 高正 (")

行動研究の立場から、宮島、勝山、嵐山の三集団における個体間距離(集団成員の凝集程度)対人距離(逃走距離、攻撃距離等)と、諸事態における vocal aggression 量を測定し、集団特性および集団の緊張度を分析比較した。(i) 個体間距離の測定: 通常の餌まき時に、餌場の中心に半径4mの円を描き、その中にのみ餌をまき、円内の布置個体を一分おきの写真撮影によって記録